

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

平成 27 年 11 月 9 日	
所属部局・職	霊長類研究所生態保全分野・修士課程学生
氏名	有賀菜津美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ウガンダ, カリンズ森林保護区
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
チンパンジー母子の調査、および現地の子どもたちへの環境教育活動
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 4 月 26 日 ~ 平成 27 年 10 月 31 日 (188 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

2015年4月26日から10月31日の約6ヶ月間でおこなった、ウガンダでの調査について報告する。

今回の渡航でカリンズでの調査は3回目を迎える。前回の2回とは違い、空港で時間を取られることもカンパラで何度も店を往復することもなく、スムーズに買い出しまで終了することができた。カンパラは相変わらず人が多く、4月の日本に比べてだいぶ暑いと感じたが、その暑ささえも嬉しく、戻ってきたという感覚が強かった。海外の企業が道路の整備を行っていたり、新しいビルがたったりと、街の成長スピードがとても速かった。また、前回帰国時(2月後半)にはスーパーで買い物客にレジ袋を配布していたが、エコバック制度が始まり、レジ袋の配布がなくなっていたことに驚いた。環境に配慮した取り組みだそう。短期間での街の変化に驚き、半年後調査を終えてカンパラに戻ってくるのが少し楽しみになった。

チンパンジーの長期調査では、よく観察できる期間とあまり観察できない期間があり、モチベーションの維持がとても難しかった。5月から6月

月上旬は、*Trichoscypha submontana* の果実が集中して実ったため、調査開始から夕方まで追跡することができた。しかし、7月後半から8月にかけては、大きな果樹がなく、母子を発見することが難しく、観察ができないという日が続いた。チンパンジー、特に母子の研究には、根気強さも必要だと実感した。*Trichoscypha submontana* は、果実の中央に種子があり、チンパンジーは果実を口に入れて少しずつ噛みながら果汁だけを飲む。Kanaというオトナメスの場合、手の甲で口の外側から押し、果汁を飲んでいるのが他の個体と違い印象的だった(写真1)。この期間は、終日この果実に執着して主に果汁を飲んでいたので、観察時間が長いにも関わらず、尿や糞のサンプル量が比較的少なかった。

スケジュール

- 4月26～27日
出発(犬山ー関西国際空港ードバイーエンテベ)
- 4月28日
カンパラにて買い出し
- 4月29日
カンパラ-カリンズ
- 4月30日～10月26日
カリンズ森林保護区にてチンパンジーの調査
- 10月27日
カリンズ-カンパラ
- 10月28～29日
Ngamba Island 訪問
- 10月30～31日
帰国(エンテベードバイー関西国際空港ー京都ー犬山)



写真1 手の甲で押しながら果汁を飲む Kana

観察対象としている M グループでは、本調査期間中 3 個体のアカンボウが生まれた。そのうち 1 個体の母親 (Shoko) は M グループ出自の個体であり、親子孫の 3 世代を同時に見ることができた (写真 2)。現在 M グループでは、性成熟を迎えたワカモノメスが集団に残り、交尾をすることも確認されている。ただし、出産をしたのはこの Shoko が初確認である。ゴンベでは約 50% のメスは移出せずに出自集団に残っている報告もあり、M グループでも同じようにメスが性成熟後も出自集団に残ることが起こっている可能性もある。母親とともに行動するワカモノメスを見る機会も多いため、今後も注目して観察していきたいと思った。

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書



写真2 妊娠中の Shoko。同じ集団に母親も妹弟もいる。



写真3 調査期間中に出産した母親 Mitsu とアカンボウの Miche

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

これまでの渡航と同じく、毎週日曜日に環境教育センターでの活動を行った。前回に引き続き、カリンズ森林保護区に住む昼行性霊長類 6 種を中心に子どもたちに名前、食物、体サイズなどをクイズ形式で教えたり、本の貸し出しをしたりした（写真 4）。日本に帰国中もカリンズ滞在中のスタッフが毎週日曜日にセンターで活動を行ってくれていたため、常時 35~40 人ほどの子どもが来るようになった。また、8 月 23 日にはトレーニングセミナーでカリンズに来ていた 7 人の学生（コンゴ 2 人、フランス 1 人、ウガンダ 1 人、日本 3 人）に講演をしてもらった。普段聞けない国の話や動物の話に子どもたちは興味津々だったようで、約 1 時間半の講演中も多くの子どもが聞き入っていた。特にウガンダ人研究者がウガンダ人にとりう形は、この環境教育センターではあまりないのでとても良い機会になったと思った。



写真 4 本の貸し出し。この日は動物の本を中心にセレクト。

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

このトレーニングセミナーを踏まえて、私たちの調査の補助を行っている現地のトラックカーが、子どもたちの前で現地語を使って講演をする機会を設けた。やはり、私が英語で話して現地語に通訳してもらうよりも、現地言葉で現地の人が教えるのが一番だろうと思ったからだ。10月4日には Monkey Talk、10月11日には Chimpanzee Talk と題してトラックカーに子どもたちに向けて話してもらった。どちらのトラックカーも幼少期に環境教育センターに来たことがあり、快く引き受けてくれた。両日とも質疑応答含めて約1時間だったが、私が話すよりも積極的に子どもたちから質問が出たことは嬉しかった。例えば、Monkey Talk ではグエノン3種の話をしてもらったが、子どもたちからの質問は Red-Tailed Monkey と Blue Monkey の作る混群に集中した。例えば、一緒に遊ぶのか、喧嘩することはあるのかなどの子どものらしい質問から、2種はチンパンジーのようにネストを作って寝るのかなど、事前に私と勉強したことを踏まえて質問した子どももいた。子どもたちがどのような部分に興味を持ち、関心を寄せているのかを理解するよい機会となった。今後も現地言葉で子どもたちに伝えるという機会を積極的に設けたいと思う。

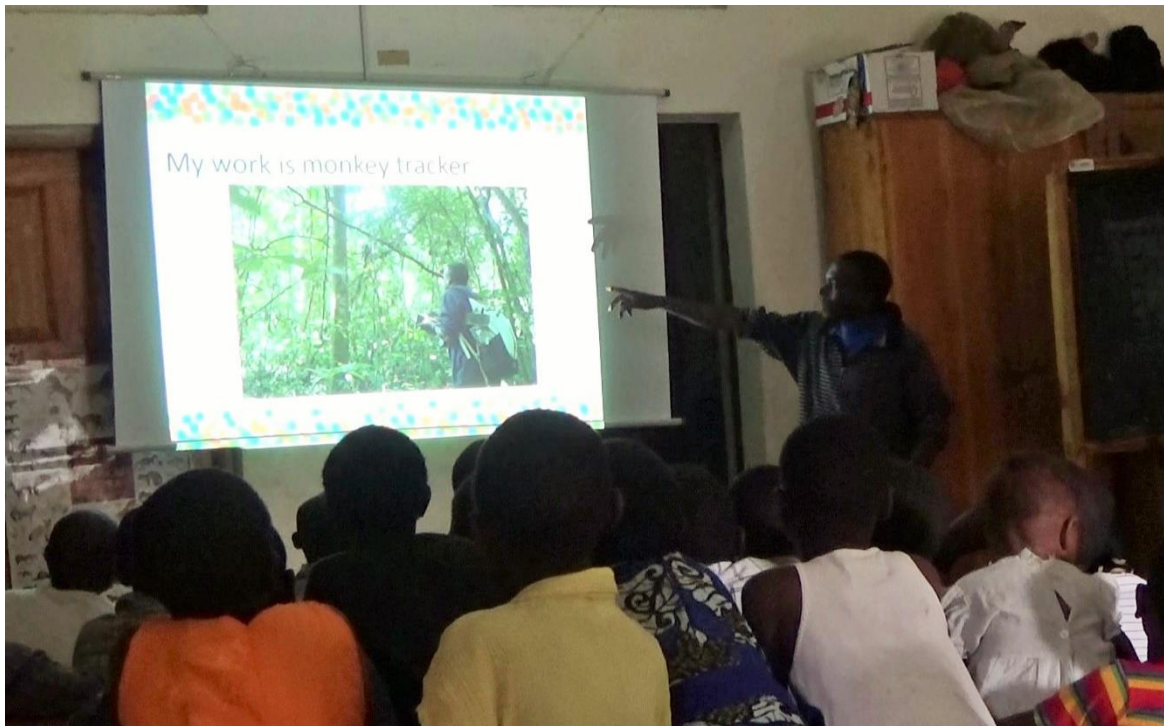


写真5 Monkey Talk でトラックカーが自分の仕事について紹介している様子

環境教育センターと Tea Estate Primary School では、前回と同じく子どもたちの霊長類に関する認知度を把握するためのインタビュー調査を行った。100人（各50人）実施し、前回よりも円滑に進めることができた。前回の調査結果と比較して今後発表していきたいと思う。また、前回の質問に加えて子どもたちの知っている動物の名前を聞き、さらにその動物が良い動物だと思うか、悪い動物だと思うか尋ねた。一番身近な動物は家畜であるにも関わらず、多くの子どもの場合はカリンズのサルまたは、国立公園にいる動物種をあげた。昆虫や両生類の名前をあげる子どもはほとんどいなかった。そして、良い動物か悪い動物か

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

を判断するのに、ヒトに対してどう接してきているかで考える子どもが多かった印象だ。例えば、ロエストモンキーは森に住み、ヒトとの接点が少ないから良い動物、ゾウやライオンはヒトを殺してしまうから悪い動物、バブーンは作物を荒らすから悪い動物などという回答だ。「可愛い」とか「かっこいい」から好きといった回答は極めて少なかった。日本で子どもたちから受ける印象とは違うと感じた。



写真6 子どもへのインタビュー中にバブーンが現れることがある（撮影：松尾）



写真7 子どもたちの顔と名前が一致してから、より親睦が深まった

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

2014年の7月に初めてウガンダに来てから約1年滞在したが、徐々に知人が増えていくことで円滑に物事が進むこともあったと感じた。カリンズの基地は森林保護区内にあり、村から離れているため、面倒なことも他の調査地に比べて少ないが、調査に補助するトラックをはじめ、環境教育センターに来てくれる子ども、近隣の村の人たちのネットワークは改めてすごいなと感じた。まだまだウガンダ人のやり方に慣れないことも多いが、周りに顔を見ると「アルガ！！」と話しかけに来てくれる人がいるという環境は心強い。「人間関係を構築する」ということに、この6ヶ月間はよい期間となった。



写真8 村の子どもたちのダンスの練習に参加 (撮影：松尾)

帰国前に Ngamba Island Chimpanzee Sanctuary へ訪問した。昨年7月にも訪問したが、今回は1泊して仕事全般の見学と私の活動の報告をさせていただいた。往路は、約25人の観光客と一緒にいたため、観光客向けの対応を見学することができた。アメリカやイギリス、スペインなど色々なところから訪問していたが、8割の観光客は何かしら Island Shop と呼ばれる場所で Ngamba Island のロゴ入りのグッズやカゴを購入していた。カリンズも NFA の職員が観光客向けに伝統的なカゴやキテンジという布で作ったぬいぐるみを売っているが、欧米から来る観光客はあまり買っていないという印象があったので、とても驚いた。やはり、オープンな価格設定や清潔感、ここでしか購入できないという限定商品、これが目の前にいるチンパンジーのためになるという実感などが、後押しして観光客が購入しているのだろうと感じた。近隣のカヤンガ村でも同じクオリティのカゴは作れるはずなので、相違点など改めて考え直すとカリンズで行っているエコツーリズムの改善に繋が

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

るかもしれないと感じた。チンパンジーの給餌見学の後は、近くにある Koome Island を訪問した。その島には 6 年前まで学校がなく、子どもが教育を受けるには島を出る選択しかなかったが、援助もあって今では校舎も立ち並んでいた。もちろん先生の補充や教室の不足など日本の離島でも聞かれるような問題点はあったが、島の人がどうにかしたいと力を尽くしている様子が素晴らしいと感じた。また Ngamba Island のスタッフとの協力もあり、女性コミュニティが中心となってビーズ作り体験やアクセサリーの販売などを観光客向けに行っていた。エコツーリズムのこれからを考える上で、とてもよい訪問となった。PWS の Annual Meeting で知り合った、Chimpanzee Sanctuary and Wildlife Conservation Trust の Executive Director である Lilly Ajarova さんとも会って、お互いが行っている教育プログラムの進捗状況や問題点、エコツーリズムの将来などについてもお話することができ、とても有意義な時間となった。やはり、将来的には一方的な支援ではなく地域住民で自主的に行うことのサポート役になりたいとおっしゃっていた。次回のウガンダ訪問時には、ぜひ Hoima 地区で行われている環境教育活動の見学をしたいと思います。



写真 9 Ngamba Island のスタッフ

6. その他 (特記事項など)

今回の出張を行うにあたり、熱心な指導を受け賜りました、湯本貴和先生、橋本千絵先生、田中正之先生に深く感謝いたします。さらに、ご支援ならびにご協力いただきました松沢哲郎先生、調査地スタッフとトラックの皆様、Ngamba Island のスタッフの皆様に深く御礼申し上げます。本活動は、PWS より助成を得て、おこないました。ありがとうございました。